

2019年度推薦入試「常識テスト」

I. 次の下線部のカタカナを漢字で書きなさい。

- (1) ギョウセキが回復する。
- (2) ゴラク番組を見る。
- (3) 税金をチョウシユウする。
- (4) 他人のモトウをする。

II. 次の下線部の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

- (1) 辞典の所作を指導する。
- (2) この噂は広く世間に流布した。
- (3) 結果は一点に収斂した。
- (4) 彼はやりかたをよく会得している。

III. 次の□に漢字を一字入れて、カッコ内の意味を持つことわざ・慣用句を完成しなさい。

- (1) □の居所が悪い。(不機嫌で少しのことでも気に障り怒る様子)
- (2) □の子。(大切に秘蔵して手放さないもの)
- (3) 後ろ□を引かれる。(心残りで先へ進めない様子)
- (4) □に火がつく。(物事が差し迫り、落ち着いてられないこと)

IV. 次の下線部分の敬語表現が適切であれば○を、適切でなければ適切な表現を書きなさい。

- (1) (先生に対して) 先生が申されたとおりにいたします。
- (2) (先生に対して) この件について、先生のお耳に入れたいことがございます。
- (3) (客に対して) どうぞ、お飲み物をいただいでください。
- (4) (客に対して) こちらは何時ごろまいられますか。

V. 次の事柄を表す言葉を、指示に従って解答欄に書きなさい。

- (1) もとは空中ブランコの落下事故に備えたネットのこと。転じて、病気、失業、事故、災害の影響を少なく抑えるために準備したものをいう。(カタカナ5字)
- (2) 男女が性別にかかわらず共に社会参加できる社会。(漢字6字)

VI. 次の□に漢字を入れて、カッコ内の意味を持つ四字熟語を完成しなさい。

- (1) □□無尽 (自由自在にふるまうこと)
- (2) □□一貫 (最初から最後まで一つの考えで貫き通すこと)

VII. 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

(A) 様々はさまざまなのか、さまざまなのか。全盲の僕は、(1) ボランティアの支援を受けてきた。点訳・音訳ボランティアたちの協力により、僕の今日があるといっても過言ではない。その意味で、ボランティア(2) なのである。最近、被災地の復興に寄与するボランティア活動が盛んになっている。来館者サービスの一環で、ボランティアによる展示解説を実施する博物館も増えた。僕は多様なボランティアを定義する際、3つのキーワード「分かち合う」「結び付ける」「創り出す」を用いている。

僕が最初にボランティアを意識したのは大学受験時だった。当時、点字の参考書・問題集はほとんどなかったので、原本を入手しボランティアに点訳をお願いしていた。電話をかけて、依頼内容を伝える。点訳本が届いたら、(ア) レイジヨウを書く。ボランティアとの交渉は、全盲の高校生にとって貴重な社会勉強となったのは間違いない。

当初、僕の中でボランティアとは、点訳・音訳を引き受けてくれる支援者という位置づけだった。その印

象が変化したのは大学合格時である。僕の合格をほんとうに我がことのように喜んでくれるボランティアが多かった。僕が目標を達成することによって、感激の輪が広がっていく。この経験は僕がボランティアを考える原点である。ボランティアとは同じ目的に向かって進み、感動を(3) 仲間であるといえるだろう。

僕と博物館ボランティアとの出会いは、米国に在外研究のために滞在した2002年である。1年間の滞米期間中にあちこちの博物館を訪ねた。とくに2泊3日でワシントンDCを単独旅行し、8つの博物館を訪問したのは懐かしい思い出である。全盲者が一人で博物館巡りを楽しんだという事実が素直に(イ) 嬉しかった。各館の入り口にはタクシーや地下鉄を使って、なんとかたどり着く。事前予約したボランティアが(ウ) タイキしており、館内の展示へと僕を(エ) ユウドウする。個性的なボランティアが多く、解説スタイルも十人十色である。今振り返ってみると、博物館の展示よりも案内を担当したボランティアの語り、人柄の方が記憶に残っていることに気づく。

従来、視覚障害者は博物館から(オ) ソガイされてきた。外国人・幼児・高齢者など、博物館に足を運ぶチャンスがなかった(カ) マイノリティーは他にも存在する。彼らを博物館に(4) 働きをするのがボランティアなのである。

米国から帰国後、僕は日本でも博物館ボランティアを育て、視覚障害者が気楽に来館できる環境を整備したいと熱望するようになった。職場のボランティア組織に呼びかけ、視覚障害者の展示体験をサポートするグループを結成した。現在、このグループは視覚障害関係の団体・個人の受け入れで実績を積み重ねている。

視覚障害者案内は単なる福祉、(キ) □□□□□□的な取り組みではない。「見学」という語が象徴するように、博物館とは「見る・見せる」ことを前提に発展してきた。視覚障害者が楽しめる博物館をめざすなら、見学という常識を問い直す必要がある。視覚障害者対応を推進するボランティアは、博物館の新たな魅力を(5) 先達だといえる。固定観念にとらわれず、自由な発想ができるのがボランティアの強みだろう。

ボランティアの原義は「自発的に○○する」である。この○○に「(3)、(4)、(5)」を入れると、ボランティアの意義が明確となる。今後もボランティア(2)への感謝を忘れず、(1)なボランティアとともに成長していきたい。だから、やはりボランティア様々なり！

(広瀬浩二郎「ボランティア様々」より)

問1. 下線部(ア)～(オ)のカタカナは漢字に、漢字はひらがなで直しなさい。

問2. 空欄(1)～(5)に入る適切な言葉を本文から選び、答えなさい。

問3. 下線部(カ)の言葉の意味を書きなさい。

問4. 空欄(キ)には、段差を取り除くなど、生活の支障となる物理的な障害や、精神的な障壁を取り除く施策、また障害・障壁を取り除いた事物・状態を指す用語が入る。その言葉をカタカナ6字で書きなさい。

問5. 筆者が下線部(A)のような問題提起をした、様々の二つの意味を20字以内で書きなさい。

問6. 筆者はボランティアの存在をどのように捉え直したか。きっかけになった最初の経験を踏まえて書きなさい。(句読点も含めて70字以内とする)

VIII. 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

どんな山であれ、自分でそこに登らなければ実感されない。だれかが初登頂をやってしまったも、その人の実感と自分の実感とは、決して同じではないのである。したがって、人類全体としては未踏であろうが、そんなことにかかわらず、各人はそれぞれに、あれやこれやの山について、実感を求める。

- (1) 実感において、人はそれぞれ、本当に自分自身であろうとする。他人も登る山に(できれば他人の

登らぬ山に)、一人登って、自分でなければ感じられないことを感じ、そういう感じを持っていることによって、自分自身が他人と代わるのでできない独自の存在であることを確認するのである。しかし、こうした独自性は、二重の意味で、他人との関係がなければ成立しない。第二に、独自性は、自分で確認するだけでなく、他人に対して主張することによって成り立つのだから、独自性を他人に表現し(ア) デタツツする手段を必要とし、それを受け取る他人の存在を必要とする。

他人の言うことではなく、自分の(A)だけを借用するのだと主張している本人でさえ、よく考えてみれば、自分の(B)が直接にとらえるものだけが、真実であり世界のすべてであると思っているのではない。彼は無意識的に、実感を(イ) シュウセイしたり、実感をもとにして、(2)それを越えて推理したりしているのである。もし、実感だけが人間の(C)のすべてであるとしたら、他人が実感するものとは、何の関係もないことになるし、自分自身の実感でさえも、時の移り変わりとともに(ウ) コマギレになってしまう。たとえば、原因と結果をつなぐのは、一回限りで繰り返さないのであって、同様な事件系列の観察が、記憶とデタツツによって(エ) シュウセキされながら、その(3) 必然的な結びつきが追求されたのちに、初めて(4) 因果関係が立証されるのである。

実感の尊重は、人が自分の独自性を求めることと、自分の認識の確実性を求めることの現れであるが、今言ったように、いずれも自分の感覚以外のものがなければ、要求は満たされないのである。感覚以外のものとは、何であろうか。それは、一方では、自分と区別された他の人々であり、他方では、直接の感覚を越えた思考である。

(水田洋「実感が常識をつきよぶ」より)

問1. 下線部(ア)～(エ)のカタカナを漢字で書きなさい。

問2. 空欄(A)～(C)に、それぞれ次のどの言葉を補ったらよいか。最も適切なものを次の中から選び、符号で答えなさい。ただしどの言葉も一回しか用いることはできない。

ア 認識 イ 感覚 ウ 実感

問3. 下線部(1)の「実感において、人はそれぞれ、本当に自分自身であろうとする」とはどういうことか。最も適切なものを次の中から選び、符号で答えなさい。

- ア ある物事を実感してみると、自分という一人の人間がここにいるからこそ物事を実感できるのだということがわかり、自分が一個の人間であることをあらためて感じているということ。
- イ 自分がある事柄を実感し、そう感じるのは自分一人であることを知ることで、自分という人間が他の人と違う「自分」という一人の人間であることを確認しようとする。
- ウ 他人が実感したことと自分の実感したことが異なることを発見し、それによって人は一人一人皆自分というものを持っているということを実感しようとする。
- エ 他人がどのように実感し、自分がどんなふうにも実感したかを比較することによって、自分という人間はどのような人間であるかということが納得できるということ。

問4. 下線部(2)の「それ」は何をさしているか。適切な言葉を本文から選び、答えなさい。

問5. 下線部(3)の「必然的な結びつき」の「結びつき」とは何と何の結びつきか。適切な言葉を本文から選び、答えなさい。

問6. 下線部(4)の「因果関係」とは何か。最も適切なものを次の中から選び、符号で答えなさい。

- ア ある物事と物事とのあいだにある、原因と結果の関係。
- イ 原因と結果とを結ぶものが事件系列の観察であるという関係。
- ウ ある人に記憶された事柄が他の人にデタツツされるという関係。
- エ 他人の実感と自分の実感とのあいだにある関係。

問7. 問題文の主旨をまとめたものとして、最も適切なものを次の中から選び、符号で答えなさい。

- ア 自分は他人と代わるのでできない独自の存在であるとは考えるが、それは実感の上の問題にすぎないのである。
- イ 実感することが人がを真の自分自身に目覚めさせ、思考することが自分は他人との関係で成り立っていることを自覚させる。
- ウ 自分が実感するものは他人が実感するものと深くかかわっており、自分自身というものは孤立しているのではない。
- エ 人は自分の実感を通して自分が独自の存在であることを確認するが、同時に独自性は他人との関係の上に存在するものだ。

Ⅹ. 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

子供には、自分と世界、自分と他者、生物と無生物、見えるものと見えないもの、昨日と今日と明日、視覚と触覚、想像と実体験、思考と身体といった区別というものがなく、およそ一切が未分化です。子供から生まれてくる表現は、それらの未分化な要素が無自覚的に統合される活動です。ですから、彼らが語るお話や描く絵は、いわゆる大人にとってはヘンであり、未熟に感じられます。

一方芸術家は、ありとあらゆる区別を了解しています。それらの区別を知り尽くしたうえで、それを意識的に合わせて表現を(ア) キズきます。ですから芸術家の表現は、いわゆる大人に日常の捉え方に変化を迫るという点において(イ) ナンカイです。

子供の芸術は、まだ分化する前の心と身体が無自覚に統合される活動であり、大人の芸術は、分化した世界をすり合わせていく活動といえるでしょう。両者の世界への関わり方は大人への関わり方は大きく異なりますが、未分化性の表出・回復という点で重なり合います。すなわち、両者の表現は似ているのです。子供の絵が多く現代美術家の目を(ウ) 惹いてきたのもそのためです。ピカソが、「子供のように描くのに一生涯かかった」と述べたのは有名な話です。しかし、いわゆる大人は子供に遠く、芸術家にも遠いゆえに、子供の表現は未熟だと捉え、大人の芸術はナンカイだと感じてしまうのです。いわゆる大人はナンカイなものを避け、未熟なものには注意、指導をたくくなります。これが、子供の芸術をありのままに大切にできない要因でもあります。

どうすればいいか。芸術とは、表現されたもののなかにあらかじめ込められたものではなく、それに接する者との間に立ち上がるものです。ならば、子供と関わる仕事をする者には、芸術家にも(エ) 見劣りしない子供の芸術を発見し、価値付ける力が求められます。そして子供の文化をコーディネートしていく(オ) キガイを持たねばなりません。

ただし、子供の表現だけを見ても、その素晴らしさは見えてきません。未熟なものとして片づけてしまう可能性があります。日本の幼児教育の父と称される倉橋惣三(1882-1955)は、若い幼児教育者に、いい詩を読み、いい絵を見ることを勧めています。何ものからも新鮮な印象を受け取り、何ものにも純真な感激と驚異を持つ芸術家の目と心にふれることが、子供とともに生きる私たちにとって、子供と同じようにものを見、同じように感じるができるようになるために不可欠な学習であると説いています。

子供に関わる者は、大人の芸術への感性を研ぎ澄まされることでいわゆる大人を脱し、子供の芸術を理解し、文化として大切にできる力量を備えた存在になります。

(『みらい×子どもの福祉ボックス 「児童家庭福祉」より コラム「子どもの芸術・文化」)

問1. 下線部(ア)～(オ)のカタカナは漢字に、漢字はひらがなで直しなさい。

問2. この文章を読み、あなたが感じたこと、考えたことを200字以内(句読点も含む)で記入しなさい。